天正
年中

美作國古城合戰記

解題

天正年中　美作國古城合戰記　一卷　著者　未詳

此書、天正年中に於ける美作西部の岩屋●神樂尾●高尾●横田五城の落去を記せるものなり。開卷目次には、此外岩尾山●安春●和泉●藤田四城の落去を記せるも、本文には見る所なし。底本とせるものにこれを脱落せるか、又始よりこの四城の事を記さざるか、今考ふるに由なし。

天正年間、作州は備前の宇喜多氏と安藝の毛利氏との折衝點にして、當時美作西部の諸城は、大率毛利氏に屬して、宇喜多氏の攻陷する所となれり。本書はこの際に於ける右五城の落去を記せるものにして、陰德太平記、備前軍記、作陽誌等と相俟つて、能くこの消息を詳にするを得べし。著者の何人たるかは知るに由なきも、傳聞の誤にぞ、書中往々史實を誤り、中には神樂尾城沒落の條を記するに當り、永祿を以つて、天正の後に置きたるが如きは、甚しき錯誤と云ふべし。今回刊行せる底本には、天保二年霜月西々條郡奥津村石原春房寫とあり。思ふに、此書はこの地方に於ける古老の筆に係りしものにして、典據正しきものにはあらざるべし。

天正年中

美作國古城合戰記

著者　不詳

第一、坪井村岩屋城沒落の事……（一）
第二、神楽尾の城沒落の事　附北分諸士隨二宇喜多一事……（二）
第三、高山の城沒落の事……（四）
第四、高尾の城落去の事……（五）
第五、横田の城落去の事……（五）
此外
岩尾山城落城、　安森城落城、　和泉城落城、　藤田城落城。

坪井村岩屋城沒落の事

天正年中作州粂北郡坪井村中北岩屋城は、備前岡山城主宇喜多和泉守直家の臣大河原大和守を大將として、加藤伊豫守芦田備後守兩人を相添へ籠置れしを、藝州の國主毛利輝元の家臣養野村西浦の城主大原主計相共に、智略を以て芦田を毛利家へ引入る故、心變じて大河原加藤兩將を謀計毛利へ屬す。此故に輝元より岩屋の城を芦田備後守秀賴に預け置るゝなり。然る所に、宇喜多より粂南郡原田稻荷山の城主原田三河守定佐、同郡荒神山の城主花房助兵衛職秀、兩簇を率して不意に岩屋の城へ押寄せ、一日の内に城を乘取り芦田一族を悉責崩し、扨城に宇喜多の伯母聟浮田淡路守を爲籠置し所に、又其後毛利輝元の臣、苫西郡山城村葛下の城主中村大炊之助賴宗・同郡養野村西浦の城主大原主計・三好五郎左衛門尉興能・同新兵衛尉元好四大將にて、手足達者の侍二十歲より四十歲迄の

者選三十二人、天正九辛巳六月五日風雨の夜潛に岩屋の城へ忍び入り、雜兵二百人計り一度に鯨聲を揚げ入込み、男女の差別もなく撫切にする間、城方の兵周章て騷ぎ八方へ逃散り、山嶽共不言落入もの其數を知らず。半時計の戰にて岩屋の城は毛利方へ乘取畢る。此節も毛利方にて原田藤七郎・立石孫市郎・西尾與五郎・片山左馬・田口、并、辻新治郎・福田盛昌此七人、一入無二比類高名す。中にも片山・田口・辻・立石は兼て武略を勵み、軍始ると孟*一所に切て廻り、浮田家に宗徒と賴みたる濱田の一族郎等百五十人を、僅の間の戰に討捕る也。則輝元・隆景・賴宗三人より右の者共へ感狀を給りけり。夫より毛利宇喜多兩方より軍兵を出して度々及戰所に、室町の昭公（*昭カ）より扱を以て双方の軍勢備をほどき、藝州備州兩國へ分り城沒落し畢ぬ。

或說に曰、花房と戰ひ其後扱になり、中村大炊之助は藝州へ歸り、備前も國へ歸る。其後城は沒落。城主無レ之。

*否、或は孟、即ち最早の意なるべきか

神樂尾城沒落の事 附北分諸士隨宇喜多事

天正七己卯歲迄は作州大半藝州毛利家へ隨ひ、是より以往備前宇喜多と戰ふ事數度、終て宇喜多も作州半國領し、津山戸川の大川を限り、南北は藝州備前家の境とする所に、永祿年中備前宇喜多より毛利領の內志戸部の出張を討取り、永禮某と言もの强力の侍を入替へ北分をも取添んと、與力同心のもの數多差添へ近鄕を夜討し、民家の財寶を掠取事狼藉也。依レ之毛利家より、田口彥兵衞尉光重大岡甚兵衞尉尙治兩將行向て是を退治す。終に志戸部の出張をば光重の手へ討取、永禮は南を差て逃行けり。尙治の手へも惡黨多く討取、尙治は變名して千波土佐守と號し、田野村神樂尾に在城也。光重は志右衞門尉と號し、先祖の領地たるゆゑ北高田庄に住居也。近鄕の惡黨を切しづめ、毛利の一族中村賴宗を以て藝州へ達す。則毛利より折紙感狀を給り、其後天正年中備前宇喜多より南部種村荒神山に城を築き、家臣花房助兵衞職秀を、領地千石に與力同心雜兵六百人計差添へ籠置く也。北分を切取らんと支度す。依レ之毛利方には、田野村神樂尾城に千波土佐守を大將として、三浦・大谷・宮川等を相添へ、花房と張合預け置也。其頃花房は備前六花*房と名に呼れ、近國にも知られし程の兵也。武略は不レ及レ言軍法連歌にも達しけるにや。職

*六花房は六花黨の誤なるべし六花黨とは花房花枝花岡花田花木花村を謂ふ

秀發句に、

いつあれとこと更山の初しぐれ

花房兼てより夜盗のものを抱置き、津山の戸川の市に商賣させ、諸方へ賣物賣らせしが、其後には神樂尾の城中へも商賣に入込様に成りければ、花房金銀を多く彼商人に取らせ、諸賣物隨分下直に爲ㇾ賣ければ、亂世打續き金銀不自由の節にては有り、彼商人の下直に賣を知り、有もの無もの入用の物買はざるもの無かりけり。然れば城中悉得意に成り、心易く毎日出入ける。或時千波土佐守人數集め、荒神山を夜討にせんと用意しけり。隱密の事成ば、城中誰か知るもの無き所に、彼商人は常に心易く出入ければ、此事を知りて早速荒神山へ告ければ、職秀打笑ふて心易く思ひ候へ迚、早速六百餘人の勢を四つに分け、一手は城より向の山の麓に隱置き、一手は城の後に伏置き、一手は勝れたる兵三十人戸川の河原に伏置き、殘る二百人の勢にて城中を差固め、寄る敵を今や〳〵と相待しを、千波方にはかゝる用意の有る事夢にも不ㇾ知、亥刻ばかりに神樂尾を打立ち、夜半時分に荒神山を取卷き鯨の聲を揚ける。※盃城中には兼て覺悟の事成ば、内外より鯨の聲を合せける。寔に山びこの音にや山嶽も崩る計に聞えしかば、流石の千波の同勢も大に仰天し、兎角する内早旗本亂れ、右往左往に敗北する。花房馬上に麾を採て、此勢に神樂尾へ押寄せ城を乘取らんと下知す。兵共得たりや〳〵と逃行く敵の跡をしたふて、打取る首數二百餘級。千波は田野村越に落行けるに、兼て花房が謀計にて、戸川の河原に伏置し三十人の兵者共、落行く敵に打紛れ、難無く神樂尾の城中へ込入りける。此時兵共立すぐり居すぐりと言事に心付ざる社運の極と淺間敷。頓て城中に打散し、並ビ懸たる矢倉々々に火を掛けゝる間、内外の敵に揉立られ、城兵防ぐに術無くして終に落城し、千波は南をさして逃出しが、馬を乘放し爰成る畑にをり敷、息をつぎ居たる所を、宇喜多の侍草木某と言もの鎗にて突き首を取る。今において此所をば千波と言傳へ有ㇾ之。毛利方より中村頼宗・田口光重の家嫡藤左衞門益重・福田勝昌、此敵兼て夜討を傳へ聞き、千波が血氣の勇を無ㇾ心元ㇾ思ひけん、五調成もの二百餘人すぐり立て、荒神山の後詰としてはせ出しが、千波勢ノ敗軍を見て追來敵悉楯籠、堅固に抱て、翌日東北郡吉見村岩尾村綾部村鉢臥等の一族追々はせ集る。然る所毛利家よ

※否又は盃カ

り岩浪兵庫に三百餘の勢を相添へ、加勢に差越され誠に取返すと言へ共、其後絶て居城するもの無之、自然と破壞に及び諸士宇喜多に隨ふと見えたり。斯て花房は、荒神山に在城して民を憐み士卒を撫し、或は敵の諸將を味方に取込む樣にいろ〳〵智略を廻しける。中にも北高田の益重は年來連歌の友なりければ、斯く亂れし世におよびても、互に花のあした月の夕べも向ひあひける。職秀是こそ能き便りと思ひ、さま〴〵と益重を言ひこしらへ、宇喜多へ隨ひ給はゞ北高田の郷は申に不一及、田野村庄一圓に、前々のごとく申あたへんと言送りければ、益重初の程は其返答もせざりけるが、混物使者を以て懇意に招きければ、益重も田野村一圓に給ふ事、先祖の領地と云ひ、殊に祖父薩摩守引乘寺を建立し、田口山と名付し程の由緒有る地成る故、毛利に隨ひ自餘の大郡を給はらんより、我身に取て本望と思ひ、終に花房に附して宇喜多の味方と成る。左有りければ、北分の輩多く備前へ志を通じける故、終に岩尾山も落城。鹽谷佐助は多胡基辰（もこもと）に討れ亡す。城をば宇喜多の臣齋藤玄蕃抱、其外安春和泉藤田の城を落し、猪股を初として今井・中島・田中の一黨悉く宇喜多へ付ければ、備前の勢日比に倍して、既に中村大炊助頼宗も葛下に堪へがたく、家臣櫻井木村と談じ、しきりに藝州へ加勢を乞へ共、此節、西國も軍眞最中成は、終に救の勢も來らず。

高山の城沒落の事

天正己卯年夏、苫北郡山下村高山城主草苅與四郎（或は三郎左衞門とも云ふ。）景繼、北郡を切とらんと望て因州宇塚越に大勢を率し、長尾村迄發向して佐淵と云ふ所に本陣を取り、武者奉行絹田兵部大夫景基、新免伊賀守長重家臣新見治部左衞門と張合ひ、しばらくせり合の內、長重の息新免三郎武略を以て景基・景繼の先手の間を取切り、是によつて新見押寄せ戰ひ、絹田兵部を討取ければ、同勢大きに敗北す。草苅景繼も足弱に成て、筏津村迄引退く所を、新見父子引續て組留る間、大將草苅三郎左衞門并一族悉引取畢ぬ。故に筏津村に景繼の墓所あり。其後大將なければ高山城沒落す。

高尾城落去の事

天正年中正月四日、室尾村高尾城主河端左近、鹿を得て則料理し、近習の小姓矢野新之丞にたべよと云ふ。新之丞云ふ、今日は大切成る愛宕精進成ば御免と願ふてたべず。左近曰、神慮と忠義は其味何れか重からん迚、鹿を終に喰せけり。ふしぎや新之丞忽亂心と成て、腰の刀を拔よりはやく左近の眉間三刀切る、左近も聞ゆる手利成ば、即座に討留といへ共、彼疵次第に痛み、後には瘧に成て二月廿五日に行年五十歳にて卒し。城兵方々へ落行き、高尾城は空虛と成也。

横田山城落去の事

天正年中、横野村横田城主田中修理大夫重昌は、往古孝元天皇の末流にて、田口・櫻井抔と祖を同うせり。依〻之永祿の頃より、横田を在城として毛利家に軍忠を盡し、苦田田中の郷の内千石加增して、勢ひ漸く近郷に振ふ。然れ共心地勝れず、終に卒去しけり。子息光井大夫、幼少にて城を持堪へがたく、密に忍び出て乳母成ける人の許にて漸く成人しけり。妹一人あり。是を具して我生れ本城麓に便りけるに、譜代の者迚は一人もなく、其所の百姓耕作の地と成り、舊地成ば迚彼所にとゞまりけるに、昔のよしみを思ひけん、所の百姓酒肴共調て饗應致す事數日なり。其内百姓光井の妹を婦妻にせん事を乞ふといへ共、是を光井得心せず。其家の言掛りし事成れば、友達を呼集め是非と光井に貫かける。光井以の外に立腹す。某、時世に至て浪客に成といへ共、正しく當所の城主重昌の嫡子也。何ぞ已匹夫の分ざいとして我妹を妻にくれよといふ、不届成るもの也と申されける、百姓共口々に言ふ樣、昔はむかし今は今と、存外言して末々の家の面目、かんにんせぬとせりかけたり。光井最早堪忍成らず、即座に彼若もの切殺す。すは切るぞと大勢一度に取掛り、なげつはづしつあしらへ共、大勢なれば不叶とや思けん。幸ひ庭に野馬居るを是幸と妹をかき乘せ、飛がごとくに東をさして逃行ける。跡にて百姓追々追掛行く。光井せめては運のよかりけん、高野

といふ所迄落のび、知る人の有るを便り一生を送られけり。

天保二辛卯年霜月下旬寫之

西々條郡奥津村　石原春房　花押

美作國古城合戰記終